

## 第6講：31 「天の定規」

## はじめに

一般に信仰とは、神や仏、大いなる存在などの超越的実在者と人間の全人格的な関わりの状態を意味します。お道においては、その超越的実在者は親神にほかなりません。したがって、お道を信仰するという事は、神のやしろたる教祖によって明かされた親神の教えを実践して生きることといえます。

今回の講座では、『逸話篇』第31話「天の定規」にみられる教祖のお言葉を手がかりとして、「信仰に生きる」ということについて考えてみたいと思います。

## 天の定規と世上の定規

教祖は、ある日、大工の飯降伊蔵に、山から一本の木を切り出して真っ直ぐな柱を作るように命じられました。伊蔵は、仰せどおり、真っ直ぐな柱を作ると、定規に当ててみるよう仰せられ、さらに、隙がないかお尋ねになりました。伊蔵が定規にあてると少し隙があったので、その旨を答えると、

教祖は、「世界の人が皆、真っ直ぐやと思うている事でも、天の定規にあてたら、皆、狂いがありますのやで。」

と教えられました。

大工の伊蔵にとって、定規は仕事に欠かせない大切な道具です。しかも、それが狂っていては仕事になりません。その定規をあてながら作った柱は、人間の目から見れば、真っ直ぐだったにちがひありません。しかし、天の定規にあてたら、狂いがあるというわけです。

これと同じ意味内容の逸話があります。教祖は、商売人に対して、「商売人なら、高う買うて安う売りはなれや。」と仰せられました。二人とも、そんなことをすると商売が成り立たない、と納得できませんでした。それは無理からぬことです。問屋から安く仕入れて、少しでも高く売るのが、商売の常道だからです。しかし、先輩から、問屋からは高く仕入れて、お客さんには比較的安く売ってあげる。そうすると、問屋も立ち、顧客も喜ぶ。その理で、自分の店も立つ。これは、共に栄える理であると諭され、成程と得心したというのです。これが天の定規に沿った商売の道ということでしょう。

（第104話「信心はな」、第165話「高う買うて」参照）

## 誠真実になること

天の定規に沿って生きるとは、阿呆になることといえるかもしれません。増井りんが教祖に、「私どもはあほうでございませう」と申し上げると、教祖は、「神様には、あほうが望み」と仰せられ、つづけて、

人が小便かけたならば、ああぬくい雨が降ってきたのやと思って、喜んでいるのやで。人が頭を張れば、あああなたの手は痛いではございませうかと言って、その人の手をなでるのやで。

と諭されました。

これに反して、人間社会では、他人からきつい言葉で言われたならば、きつい言葉で一言も二言も言い返しをする。頭を一つ叩かれたら、一つも二つも叩き返しをするのが、利口な人の

返しであり、当たり前のことなのかもしれません。

ところが、他人から言われても、阿呆になって、言い返しをしない、叩かれても叩き返しをしないどころか、「その人たちが救けてやって下さいませ」と神様にお願いする。これが真実の誠であり、天の定規に沿った判断・行いといえます。「たんのうは真の誠」と教えられますが、この誠真実の心になるには、「かしのもの・かりもの」の教理を物事の判断の定規として心の内に治めることが大切だと教えられます。

（『誠真実の道・増井りん』97～99、162～163頁参照）

## 教祖ひながたに照らして

人の生きる道はさまざまに異なります。もちろん、信仰者としての日々の生活といえども、社会で真っ直ぐな事、正しいこととされている常識や法を無視して生きていくことはできません。なぜならば、私たちは真空の中ではなく、さまざまな制約のある現実の社会に生きているからです。そこには、天の定規と世上の定規のはざまでの苦悩と葛藤があります。

人間には心の自由が許されていますが、「おさしづ」に、「心の理と道の理と、しっかり合わせてくれにやならん。…外の錦より心の錦、心の錦は神の望み。」（明治35年7月20日）とあります。教祖によって啓かれた道は「神一条の道」です。この道を一筋に通ることは容易なことではありませんが、わが心を「道の理」すなわち天の定規に合わせて通ろうと心がけることの大切さを諭されています。

その手本こそ、教祖のひながたなのです。「おさしづ」に、「世界の道は千筋、神の道は一条。世界の道は千筋、神の道には先の分からんような事をせいは言わん。ひながたの道が通れんような事ではどうもならん。…ひながたの道を通らねばひながた要らん。」（明治22年11月7日）とあります。お道の信仰に生きるとは、親神と常に向き合いながら、教祖のひながたを自らの判断基準、行為規範とすること、それが天の定規に沿った真っ直ぐな生き方といえるのではないかと思います。

## まとめにかえて

信仰者として、この現実社会の中で生活している点では、普通の人間と変わりありませんが、親神（教祖）との内的関わり・対話において、自らが今命じられていること、あるいは為さねばならないと考える理想を生き抜こうとします。しかし、自己の現実の生き方が決して理想のものでないことは、誰よりも信仰者自身が自覚していることです。

したがって、信仰者にとって大切なことは、天の定規と世上の定規にもとづく生き方に乖離がないことではなく、それを少しでも縮めようと努力することです。言い換えれば、信仰に生きるということは、この乖離がもたらす落差の意識を、天の定規に沿った生き方を志向するエネルギーへと変換することであり、そこに信仰のダイナミズムがあるのです。

その意味で、自己の信仰は日毎に新たなるものといえるでしょう。